

# 「ことばの教育」パイロット校事業 報告書

学校名	広島県立廿日市西高等学校
校長名	守下 智昭
所在地	広島県廿日市市阿品台 6 - 1
H P	http://hatsukaichinishi-h.hiroshima-c.ed.jp
学級数	23学級
タイプ	○

## 1 研究の概要

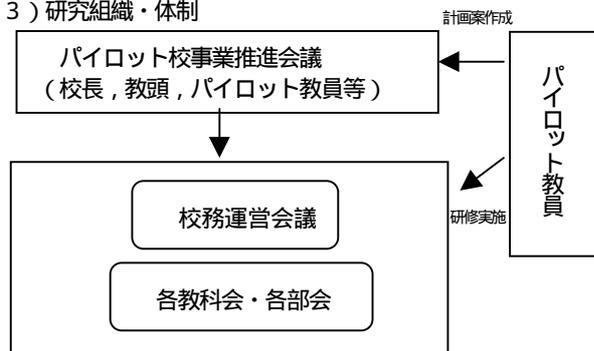
### (1) 研究主題

「学校全体で取り組む言語技術を生かした教育のあり方について - 自分の考え・知識・体験を伝え合う力の伸長をめざして - 」

### (2) 研究のねらい

平成17, 18年の2年間、生徒の「自分の考え・知識・体験を伝え合う力の育成と伸長」を目指し、教育活動全般において生徒に「ことば」を意識させ、その能力の向上を図ってきた。今年度は、学校全体としてより組織的な取り組みを計画し、まず教職員が「言語技術」の研修を深め、授業内外でその技術を活用することによって、生徒全体の「ことばの力」の変容を図った。さらに生徒が、日常生活でもその力を発揮することによって互いを認め合う雰囲気生まれ、自己存在感を抱くことができるようになることが目標である。

### (3) 研究組織・体制



パイロット教員(推進教員)は、教職員間の連携を図り、校内研修会等を通じて情報提供を行う。

管理職・各教科主任・企画研修主任・企画研修部担当者・パイロット教員で構成する推進会議において、計画・調査等の集約分析・諸情報の交換などを行う。

校務運営会議は学校組織としての取り組み内容を把握する。

諸会議において情報交換を行い、具体的に言語技術を用いた教育活動を実践する。

## 2 2年間の取組みの概要

### (1) 「ことばの教育」に関する校内教職員研修会の実施

パイロット教員が、講習会において学んできた「言語技術」(=自分の考えや意見を論理的に思考し表現する技術)について、その具体的手法や授業における実践例等を教職員に伝えた。

### (2) 「言語技術」を活用した各科目授業の年間計画作成

各教科・科目において「言語技術」を活用した具体的な授業内容を計画し、それを学年ごとに一覧表にまとめ、年間を通して系統立った教育活動計画を策定した。また、教職員の自己申告書やそれに連動するアンケートにも「ことばの教育」に関わる観点を設け、それぞれの教育活動において「言語技術」を活用することを意識づけた。

### (3) 科目における「言語技術」を活用した授業展開

(2)の計画を基盤にして、教員側がどのような「言語技術」を用いるか、そのことからどのような効果が期待できるか、といったことを意識して授業を展開した。

### (4) 「総合的な学習の時間」における「言語技術」の指導

「総合的な学習の時間」において調査・研究・発表といった表現活動も取り入れられているため、まず「言語技術」の基本を学ばせ、それを諸活動に活用するよう指導した。

**1学年** 新聞コラムを活用した学習を行い、「みんなの新聞コンクール」に応募した。さらに、職業の聞き取り調査や職業人講話で学んだ内容と自分の意見をまとめ、クラスで発表する活動へと発展させた。

**2学年** 「今までの自分、これからの自分」というテーマでエッセイのコンクールに応募した。また上級学校訪問等で研究した内容を、グループごとにまとめ発表した。さらに、受験小論文のテーマとして問われることの多い内容について知識を深める学習を行った。

**3学年** 作文と小論文の違いを理解させ、基本の型を踏まえた小論文を仕上げさせた。さらに、朝日新聞掲載「教授の紙上特別講義」の記事をもとにテキストを作成し、知識を深める学習に取り組みせ、自分の意見をまとめ、クラスで発表する活動へと発展させた。

### (5) 「ことば週間」における取り組み

学校全体が意識的な言語活動を展開する「ことば」週間を設定した。その期間中の具体的な取組みは次の三点である。

#### 朝読書の時間に「言語技術」の基本を学ぶ

朝の読書を行っているS H R前の10分間、全学年一斉に、日常生活のさまざまな場面を具体的に想定して「言語技術」の基本を復習するプリント学習を行った。

#### 各授業の中で「言語技術」を生かす

全教員が「言語技術」を活用した指導案を作成し、朝の時間に復習した「言語技術」を実際に使えるよう授業展開を工夫した。

#### 日常会話の中でも「ことば」を意識する

授業以外の活動、L H Rや「総合的な学習の時間」、クラブ活動や教員との会話など、普段の言語活動から「言語技術」を意識した指導を行った。

### (6) 意識調査やアンケートの分析

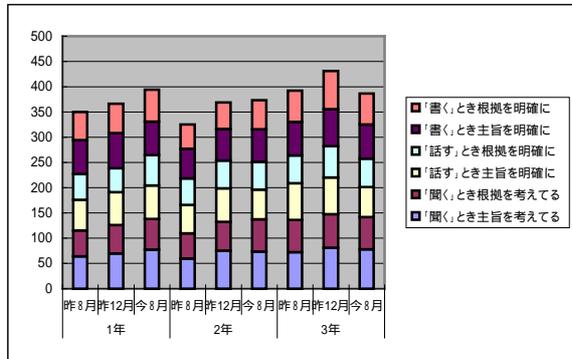
「ことばの教育」パイロット校において2年間で3回生徒対象の実態調査や意識調査、教職員対象の意識調査を実施し、「ことばの教育」に対する意識を高めるとともに、その結果から変容を分析した。また、本校独自で教職員対象に記述式のアンケートを行い、その意識の変化を分析した。

### 3 研究の成果と課題

#### (1) 成果

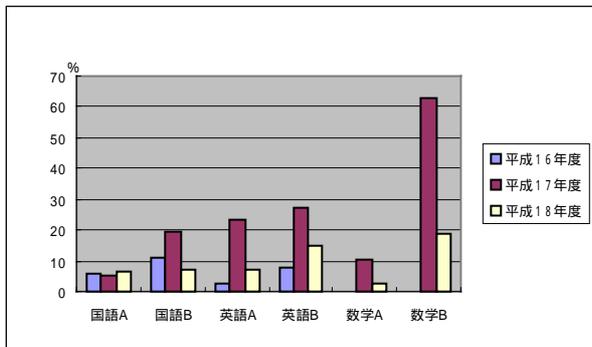
##### 生徒の言語活動に対する意識の変化

パイロット校対象「ことばの教育」に関する意識調査の結果、授業内で言語活動を行うときに、自分の主張を意識するとともに根拠や理由を明確にしている生徒が増えていたことがわかった。



今年度の3学年の数値は下がっているが、これは対象生徒が異なっており、昨年度12月の2学年での結果と比べると、その意識は高まっている。これは、日常のやりとりの中でも友だちの言葉遣いを直す生徒が見られるようになったなど、変容がみられる。

さらに「広島県高等学校共通学力テスト」論述問題において、無答率が減っている。1学年はほぼ同率だが、2学年は激減している。2学年はいわゆる中だるみが生じて1学年と比べて学習意欲が低下する傾向があるが、無答率が低下しているということは、「書く」ことに対する抵抗感が薄れてきているからだと考えられる。



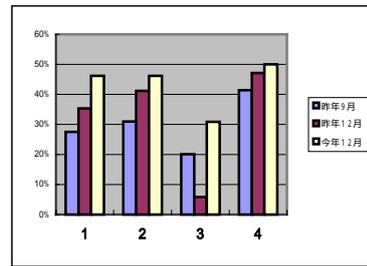
##### 生徒の表現力の向上

生徒に「伝え合う力」を意識させるため、校外の各種コンクールなどに積極的に応募させた結果、次のような成果を上げている。

- ・全日本ろうあ連盟・朝日新聞社主催「高校生の手話によるスピーチコンテスト」にて3位に入賞
- ・大阪経済大学主催「17歳からのメッセージ」にて学校特別賞を受賞
- ・神戸学院大学主催「5年後の自分への手紙」で朝日新聞社賞を受賞
- ・広島県教育委員会主催「ことばの輝き」優秀作品コンクールの体験レポート部門にて優秀賞を受賞 など

##### 教職員の「ことばの教育」に対する意識の変化

「ことばの力」を指導する側である教職員の意識に変化があった。本校教職員対象のアンケートの中で、特にその変化が大きいものを挙げる。



- 1 話すとき、根拠を明確にしている
- 2 書くとき、根拠を明確にしている
- 3 構造的な板書をしている
- 4 書くとき、構成を考える

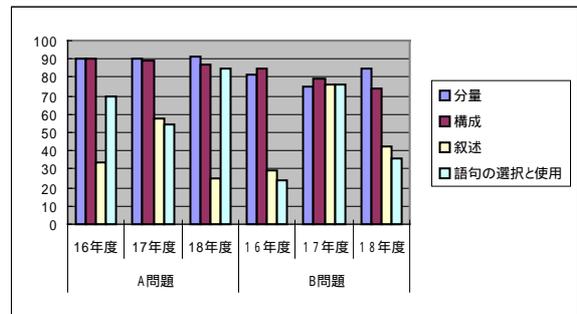
またアンケートの記述には、次のような回答があった。

- ・生徒ではなく先生方の「ことばの使用」に変化があったと感じる。
- ・授業内で「主語・述語をはっきり」「根拠を明らかに」という意識づけをしている。
- ・定期考査における論述問題の数を増やしている。
- ・生徒の話に耳を傾けるように心がけている
- ・こちらがことばで誘導するのではなく、生徒自身のことばが出てくるまで待つことを心がけている。

こうした教員側の変化は生徒への刺激となって、その変容につながったのではないだろうか。

#### (2) 課題

「広島県高等学校共通学力テスト」論述問題における過去3年間の結果から論述する分量は年々定着してきているが、反対に叙述の通過率は下がっており、論理的な思考力は伸びていないことがわかる。



このことは、同テストの今年度A問題においてデータを踏まえて論述していない生徒が25%、B問題において問題文は踏まえているが論理的に述べていない生徒が34%いることにも表れている。教職員アンケートの記述内には、文章を書く際に「型」を踏まえることにばかりとらわれ中身が伴っていない、という指摘もあった。「言語技術」はあくまで論理的に表現するための手段であって目的ではない。まず、「言語技術」を導入することで「どう表現すればいいのかわからないから書けない(話せない)」といった言語活動への抵抗感は薄れてきている。次は、その「型」「技術」と自分の考え・知識・体験をどのように組み合わせるかを、ということを生徒に考えさせていくことが課題となる。